

第一テンス形は、おおくが過去形。非過去形もないわけではない。第二テンス形は非過去推量形。

・伝聞をあらわす「～トイウコトダ」「トイウコトダッタ」

第一テンス形「イウ」はテンス的な意味から解放されている。第二テンス形は非過去形と過去形の両方のばあいがあるが、テンス的な意味はかわらない。ニュースソースが特定であるばあいに、「トイウコトダッタ」になりやすい。

注

- 1) ダブルテンスのかんがえかたと問題提起は、高橋太郎1993「ダブルテンス研究のすすめ」（『立正大学国語国文29』）と高橋1994「ダブルテンスの観点からみた<スルコトガアル>の種々相」（立正大学『文学部論叢100号』）でのべた。
- 2) 動詞句が「コト」をくわしくしているか、「コト」が動詞句を名詞化しているかについては、高橋1994の1.の3)でのべた。
- 3) これは、高橋1994の5.と共通する問題である。
- 4) このあたりのことは、高瀬匡雄1995「現代日本語における伝聞形式のムード的な性格とテンス的な性格」（立正大学『大学院年報12』）もあつまっている。

7. 諸形式のダブルテンスとしてのありかた

- 意味づけの「～トイウコトダ」

第一テンス形「イウ」は動詞性をうしなっていて、テンス的な意味から完全に解放されている。第二テンス形は、形も意味も自由である。そして、絶対的なテンス。

- 理由・前提の「スルコトダシ」

この項は、いろんなものを雑多にいれこんであるので、統一的な特徴がない。

- とるべき方法の「スルコトダ」

第一テンス形は、ぜんぶ非過去形で、おおくは未来をあらわす。無人称のばあいはテンス的な意味から解放され、第二テンス形が過去形の場合は相対的テンスとして以後をあらわす。第二テンス形は、しばりとしては自由であるが、おおくは非過去形で、積極的なテンスの意味はないといってよいだろう。

- 感動をあらわす過去形「シタコトカ」「シタコトデアッタ」

第一テンス形は過去形で、過去をあらわす。疑問詞系の修飾語や陳述語にささえられると、「コト」のあとのコピュラがおちて、「コトカ」になる。つまり、第二テンス形がないことになる。「コトデアッタ」のばあい、第二テンス形は過去形である。このばあいのテンス的な意味は、両過去形が共同して、ひとつの絶対的テンス、過去をあらわしている。回想という感動的な意味をあらわすのも、両者共同でひとつである。分業していない。ダブルテンスの単位性を見本といえるだろうか。

- 感情をまじえた評価的な意味づけの「デキルコトダ」

第一テンス形は過去形または非過去形の可能動詞で、どっちになってもテンス的な意味はかわらない。「コトネ」はコピュラがおちているが、おちなければならないのではなく、「コトダネ」「コトデスネ」「コトデゴザイマスネ」にしてもかまわない。第二テンス形は非過去形である。

- 想像の内容をあらわす「スルコトダロウ」

第一テンス形は非過去形も過去形もあり、絶対的テンス。第二テンス形は非過去推量形。「AハBダロウ。」タイプのほうなら、「スルコトダッタロウ」というのもあるかもしれないのに。

- 感動をあらわす推量形の「シタコトダロウ」

・マシモ・プラヌーデについて、或る博識の知人に私がといあわせたところ、これは直接ではないが、イタリアの文芸復興に貢献した偉い坊さんだということであった。(井伏鱒二「イソップのお話を読んで」)

(ニュースソースが不特定といえる例はみつからなかった)

(2) 伝聞の「～トイウコトダ」と「～トイウコトダッタ」のつかわれかた

つぎの表は、終助辞や接続助辞のつかないデータのかずをしめたものである。

～トイウコトダ ～トイウコトダッタ 小計	会 話 文	地 の 文	合 計
ソ ー ス は 特 定	$\frac{11}{4}$ 15	$\frac{11}{33}$ 44	$\frac{22}{37}$ 59
ソ ー ス は 不 特 定	$\frac{3}{0}$ 3	$\frac{5}{0}$ 5	$\frac{8}{0}$ 8
合 計	$\frac{14}{4}$ 18	$\frac{16}{33}$ 49	$\frac{30}{37}$ 67

この表からつぎのことがいえる。

(i) 「～トイウコトダ」と「～トイウコトダッタ」の比率は、
会話文では<14 : 4>、地の文では<16 : 33>で、
「～トイウコトダッタ」は、地の文でつよい。

(ii) ニュースソースの特定なもの和不特定のもの比率は、
会話文では<15 : 3>、地の文では<44 : 5>で、
ともに特定のものほうがずっとおおい。

この点は、おなじ伝聞でも、「～そうだ」とことなる。

(iii) 「～トイウコトダッタ」は、ニュースソースが特定のものばあいにはしかつかわれていない。

(iv) 「～トイウコトダ」は、ニュースソースが不特定のものばあいにもつかわれている。

(1) 両者の例文

「～トイウコトダ」, 「～トイウコトダッタ」には伝聞をあらわす用法がある。伝聞には、ニュースソースが特定のばあいと不特定のばあいがあるが、「トイウコトダッタ」には、不特定のものがみつからなかった。⁴⁾

[～トイウコトダ]

(ニュースソースが特定)

- ・詳しいことは存じませんが、母の話ですとお作事奉行の津田さまがなすったということでございます。(山本周五郎「いさましい話」)
- ・酔っぱらいのお梅さん儀、いつかも友人の話では、店仕舞に近い時刻、酔ってスタンドにもたれて一人で泣いてたということです。(井伏鱒二「手紙の往復」)
- ・三上田鶴子に逢った女といえば、計算係の橋本啓子がそうです。ただし、彼女はその前の晩に三上田鶴子に誘い出されて、ある喫茶店で一時間ばかり話をしたということです。(松本清張「ガラスの城」)

(ニュースソースが不特定)

- ・なんでも寿司銀では、大量の応募シールを手に入れるためにテレビを購入したということだ。(林真理子「玉呑み人形」)
- ・半導体の場合、最後の解決は、現地生産というのが一番現実的な考え方で、各社とも欧米や東南アジアに工場をつくっている。現地雇用増大に貢献できるし、米国でつくったのを日本に輸出することで、不均衡解消に役立つということだ。(毎日新聞 1985. 10. 3.)
- ・話かわって、爺はそのふくべのおかげでたいそうな長者になりました。そして、金七孫七の二人の童と楽しい月日をおくったということでもあります。(関敬吾「日本の昔話Ⅱ」)

[～トイウコトダッタ]

(ニュースソースが特定)

- ・そして五月になり、父親が死んだ。姉が電話でそのように知らせてきた。いつものように山歩きをしていて、沢で足をすべらせて岩に頭を打ち砕いたということだった。(火の河の)
- ・私はタヌキ汁はまだ食べたことがないから知らないが、佐藤垢石の話では、タヌキそっくりのムジナの肉を使ったタヌキ汁は、すこぶる頂けるということであった。(井伏鱒二「私の動物記」)

う。（宮本輝「錦繡」）

- いつも十一時が打つころには、外に車の音がきっとしてくるのです。今夜はどうしたことだろう、とおかあさんはおもいました。（新見南吉「和太郎さんと牛」）

[想像の内容を感動的にさしだす推量形] 状況をおしはかって感動することをあらわす。文中で疑問詞派生の修飾語や陳述語と共存するのがふつうである。

- もしも横にひろがったこの建物の空間というものを考えずに、ただ垂直に、彼の身体の占めている部分だけを垂直に切り取るとするならば、彼は何という高さにいることだろう。（福永武彦「飛ぶ男」）
- 犯人はおそらく、相当な返り血を浴びたことでしょうね。（白い影）
- それにしてもよく御無事でいらっしやいましたねえ。どんなにか御苦労なさった事でしょうに。（石川達三「幸福の限界」）

(3) 現象の感動的な意味づけ

現象をとらえて、それを感動的に意味づけるいいかたである。話し手は、その現象を事実としてしているのです。その推量形は、その意味づけ・評価的な側面とむすびついている。しかし、このばあいの推量形は、おしはかりよりも、感動の形態としてはたらいっている。第一テンス形が過去形になると、回想の要素がくわわる。

- それまでは思い直すと、姉妹だという事実はわきまえていても、その二人をつなぐものを見出せず、そのことにたよっていた。慎一は牧の蒼ざめて、唇を強く噛みしめすぎて血をにじませた顔を見、なんと似ていることだろうと感嘆していたのだった。（火の河の）
- 嘘、欺瞞、エゴをかかえ、わたしはなんと多くの人々を、いつわり、あざむき、たぶらかしてきたことだろう。（もう頬づえは）
- 「似てないね、実加、お姉さんに」クラスメイトから、実加は何度そう言われたことだろう。（赤川次郎「ふたり」）
- 柳生さんが駆けつけてくれるまでの数十分のなんと長く感じられたことでしょう。（つかこうへい「スター誕生」）
- 思えばなんとした愚かな回り道を筆者はしたことであろう。（高見順「故旧忘れ得べき」）

6. 伝聞をあらわす「～トイウコトダ」と「～トイウコトダッタ」

- スリッパをぬいで、そろそろと靴にはきかえた。もういいの。後ろに看護婦が立っていた。
おそらくわたしは植物のような顔をしていることだろう。(もう頬づえは)

超時

- 若いきみがそういう言葉を口にするには、さぞかし勇気がいることだろう，ということだけはわかるよ。(ドラマティック)

仮定条件の帰結

- もしこの手紙をお読みになっているとすれば、きっとあなたには退屈極まりない文面であることでしょう。(宮本輝「錦繡」)
- それから少し張り込んで、日本庭園のあるホテルにでも泊ったら、どんなに心地良く、くつろげることだろう。(津島佑子「火の河のほとりで」)

[シタコトダロウ] (このかたちは、「スルコトダロウ」よりも用例がおおい。)

過去

- わたしの葬式ももうお済ましになったことでしょう。(井上ひさし「江戸の夕立ち」)
- この土地の人間として定着するまでには、寂しさや心細さとの戦いがあったことであろう。
(森村誠一「人間の証明」)
- 私は髭も剃らず、汚れた靴を履き、カッターシャツの首筋には垢をつけて、しかも泥のような顔色をしていました。誰が見ても、私という人間の置かれている環境はひと目で見抜けたことでしょう。(宮本輝「錦繡」)

反現実の仮定条件の帰結

- 子供の頃、街角を曲って不意におばけに向かい合ったら、きっと私はそういう表情になったことだろう。(吉行淳之介「鳥獣虫魚」)
- あれがあのまま二日とつづいたら、彼は逃げ出すならともかく、ほんとに相手を殺していたことだろう。(小島信夫「アメリカン・スクール」)

(2) 疑問の内容から評価・感情的なものへ

[疑問の内容をかかげる推量形] 想像の内容をかかげることにおいて、(1)と同様であるが、その実現のたしかさや不明の点をたずねるかたちでさしだしている。

- 夫婦生活というものは、妻が、良人の、餌食になって、吸収されてしまうことだろうか。
(林芙美子「めし」)
- 死に行かんとしていた由加子の中には、どんな過去の映像が映し出されていたことでしょう

格がはたらいっているようにおもわれる。「スルダロウ」「シタダロウ」など、推量形は、間接的な認識や想像によってとらえたことをのべたり、確認できないものとしてのべたりするのにつかう語形であるが、「スルコトダロウ」「シタコトダロウ」になると、その間接的認識なり想像なりの内容を積極的におもてにだしてのべるといふ感じがでてくる。この節の標題を「想像の内容をかかげる」としたのは、このような、「スルダロウ」「シタダロウ」とのちがいをだそうとした結果である。くわしくいうときには、「想像の内容をかかげて、その実現を推量する」といえばよいだろう。

想像の内容の実現する時間についていえば、「スルコトダロウ」は未来または超時、「シテイルコトダロウ」は現在、「シタコトダロウ」は過去である。仮定条件の帰結をあらわすばあい、「シタコトダロウ」「シテイタコトダロウ」のような過去形は反現実になることがおおい。

直接経験による認識とくらべて、想像による認識は積極的であるとかんがえられる。なぜなら、想像は、その内容をみずからつくりださなければ実現しないからである。わざわざ想像するからには、その想像をひきおこす原因があるはずである。つまり、そのことをわざわざかんがえなければならないような背景があるはずである。「スルコトダロウ」によってあらわされる想像の内容に日常的でないものがおおいは、そのこととむすびついているのだろう。こうしたことをかんがえると、この形式が感動表現のほうへひろがっていくのには、必然性があるようにおもわれる。

[スルコトダロウ]

未来

- 雪どけとともにネズミは土からあふれ、灰色の洪水となって林になだれこみ、田畑にひろがってゆくことだろう。(開高健「パニック」)
- 野郎を片づけたらあっしは自首して出ます、無宿のならず者が喧嘩をして、一人が一人をあやめ、そいつをあっしがやったと、いつかお耳にはいることでしょう。(山本周五郎「ひとでなし」)
- ……いやいや、なにも出さずにただ遊びをしたわけではない。未来への期待というものを残してきた。これは相当に高価なものかもしれないぞ。みなそれぞれ、それを胸に抱いて、これから楽しい日々をすごすことだろう。(星新一「ひとにぎりの未来」)

現在

- あの鼠はどうしたろう。海へ流されて、いまごろはその水ぶくれのした体を塵芥(ゴミ)と一緒に海岸へでも打ちあげられていることだろう。(志賀直也「城之崎にて」)

式だというべきであろう。

- これはめずらしいことだ。（関敬吾「日本の昔話Ⅰ」）
- さびしいことです。（開高健「裸の王様」）
- 旦那さまみてえない方ががぶりいくようじゃ神も仏もないことです。（佃祭り）
- 大層お硬いことですな。（三遊亭小圓朝「粗忽の使者」）
- やァ…どうも…へえェ……お寒い事ですなァ……（三遊亭小圓朝「二番煎じ」）
- なんというばかなことだ。（山本周五郎「のうぜんかずら」）

5. 推量形から感動表現へ

(1) 想像の内容をかかげる「スルコトダロウ」「シタコトダロウ」

「スルコトダ」「シタコトダ」は、もともと名詞述語文の述語になる形式である。つまり、「彼がいいたいのは、富士山にのぼることだ。」「彼のおもいでは富士山にのぼったことだ。」の「のぼることだ」「のぼったことだ」は、言語・思考活動や言語・思考作品の形式をあらわす主語に対して、その内容をあらわす述語である。これは、「AハBダ」の「Bダ」であって、今回の論文の対象からはずしたものである。

ところが、この「～コトダ」は、推量形「～コトダロウ」になると、「彼のゆめは富士山にのぼることだろう。」のような構造の文のなかでつかわれる例がほとんどなくて、たいていの使用例は、「彼は富士山にのぼることだろう。」のような構造の文のなかであられることになってしまう。こうなると、名詞述語文「AハBダ」の「Bダ」であるよりも、動詞述語文「彼は富士山にのぼるだろう。」の「ノボルダロウ」にちかい性格をおびることになる。ここで、「ゆめは富士山にのぼることだろう。」と「かれは富士山にのぼることだろう。」の構造をくらべてみると、前者は「富士山にのぼること」がひとまとまりとしてBになり、それにコピーラ「だろう」がついて、名詞述語をなしているのに対して、後者は、まず「のぼることだろう」がひとかたまりになって動詞述語相当の述語をなしており、それを「富士山に」で拡大していることがわかる。こうなった「スルコトダロウ」は、ダブルテンスの形式として今回の対象のなかにはいつてくるのである。

いま構造のオオワクをみるなかで、「彼は富士山にのぼることだろう。」は、「彼のゆめは富士山にのぼることだろう。」よりは「彼は富士山にのぼるだろう。」にちかいといったのだが、「のぼることだろう」は「のぼるだろう」とおなじではない。やはり「コト」のもつ内容しめしの性

- 娘は声に出してわらった。「それがお母さんのごまかしなんだ。」という。「うまいことを言って結婚を承知させてさ、一旦お嫁にやっしまえば、あとはお母さんの知ったことではないって訳ですからね」(石川達三「幸福の限界」)
- 関係ない！ ぼくは4423にいたんだ。隣室にだれの血が付いていようと知ったことではない。(終着駅)

(3) 感情をまじえた評価的な意味づけ

つぎの二例は、いずれも、鴎外の「雁」からひいたものである。これとおなじパターンの文、つまり、<可能形式+コト+ネ>というパターンの文は、今回の六十余冊の文庫本のなかにはみつけられなかった。筆者の直感では、べつに古くさいとは感じないが、第一テンス形をかえて、それぞれ「デキルコトネ」「シラバックレテイラレタコトネ」にできるかどうかをたずねられたら、「たぶんだいじょうぶだとおもうが、確信はもてない」とこたえるよりしかたがない。「デキタモンダネ」「デキルモンダネ」「シラバックレテイラレルモン(ダ)ネ」「シラバックレテイラレタモン(ダ)ネ」にかえるのなら、チューチョなく、OKサインをだせるのだが。この判断がいちおうアテになるとすれば、このパターンでは、「モノ」より「コト」のほうがふるそうだということと、「コト」にしても、「モノ」にしても、そうはちがわないのだということがいえそうである。

それでも、「コト」にするとアクチュアルな感じ、「モノ」にするとポテンシャルな感じがしてくるように、なんとなくおもわれるのだが、どうだろう。

- あなた好くそんな真似が出来た事ね。わたしには商用があるのなんのと云って置いて、困者なんぞを拵えて。(森鴎外「雁」)
- 「ひどいじゃありませんか。好くそんなにしらばっくれていられる事ね」夫の落ち着いたいるのが、却って強い刺激のやうに利くので、上さんは声が切れ切れになって、湧いて来る涙を襦袢の袖でふいている。(雁)

この章にはいって、(1)も(2)も、第一テンス形は過去形にかぎられていたが、ここだけには(つまり、可能形式のばあいには)、両方がでてくることは、きちんとかいておこう。

(4) 形容詞のばあい

つぎの第一例のように、主語と述語が基本的なすがたであらわれているものは、「AハBダ」のなかまなのだが、主語のないものは、評価的なものを感情的にあらわしているダブルテンス形

「スルコトダ」形式の感動表現は、第一テンス形が動詞の過去形または形容詞であることとながらものがおおいが、そのほかに、第二テンス形式が推量形であることに端を発しているものもある。これは、つぎの第5章であつかうことにして、この第4章では、前者をあつかう。

(1) 現象の回想をあらわす「シタコトカ」「シタコトダッタ」

シタコトダッタには、感情をまじえた回想をあらわす用法がある。これに似た用法は、シタモノダッタにもあるが、そのばあいは、なん度かの経験を一般化して回想するのに対して、こちらは、経験を一般化することなく、現象そのもののすがたで回想している。「現象の回想」としたのは、そのためである。「シタモノダッタ」には、かえられない。

「どんなに」や「なんと」などの副詞があらわれることがおおいとおもれる。

・それをまあ、選(ヨ)りにも選って!——と私は、その時芸術家の感興を弁えぬ村人たちから、最も不名誉な形容詞を浴びせられたことであった。(牧野信一「ゼーロン」)

・ああ、その時僕がどんなにドキドキしたことか。(森瑤子「ドラマティック・ノート」)

つぎの例のように形容詞のばあいもあるし、そのつぎの例のように、動詞であっても、形容詞相当のものもある。

・この子に対する盲目的な無制限に湧いてくる愛情に較べれば道雅や悦子をそだてたころの自分はわが子に対して何と冷たく頑なであったことか。(円地文子「女坂」)

・しかし困ったことだった。肝腎の住職が戻ってこない留守中に、葬式をしなければならぬ。(雁の寺)

(2) 現象を評価的に意味づける「シタコトダ」

現象そのものを、評価しながら意味づけている。つぎの第一例は、いまそこに坊さんがいないことがこまったことなのである。もしこれを「コマッタモノデアル」にすると、いつもそういうことがおこることが、あるいは、慈海という坊さんがこまったものだということになる。第二例は、<よくわかっていることだ>ということであらわしているが、もし「シレタモノヨ」にすると、<たいしたことはない>ということであらわすことになる。

・困ったことである。慈海は来ていない。どこへいったのか見当もつかない。(雁の寺)

・亡命の身には希望だけが糧だ、知れたことよ。(立原正秋「帰路」)

「コマッタコトダ」や「シレタコトダ」の例はかなりある。これらは形容詞的な意味にずれて、固定している形式である。また、うちけしの「しまったことではない」も、固定した形式である。

(山本周五郎「菊千代抄」)

この例は、「することはない」にかえるためには、「おまえの」を「おまえが」にかえなければならぬ。つぎの例は反語である。つまり、「まつべきだ」といっているのである。

- ・証拠は速達で送ったというのだから、しばらくはそれを待つことではないか。(訃報は)

(3) スルコトダツタ

とるべき方法をあらわす点は、第二テンス形が非過去形のばあいとおなじであるが、第二テンス形が過去形になると、過去にそのような方法をとるべきであったことをあらわすだけで、はたらきかけ性はない。

- ・彼らは週末をすごす別荘を持っていないから、うまくするとシーズンオフにも利用しそうな気がする。大急ぎで、このホテルのパンフレットを作ることであった。

(平岩弓枝「花ホテル」)

- ・ここからは一番も負けられない。ともかく先手必勝で、相手を焦らせることだった。

(北杜夫「さびしい乞食」)

これらは、「しなければならなかった」のかたちにかえることができるだろう。

(4) スルコトダロウ

推量形の例はひとつしかみつからなかったが、二人称のばあいは、やはり、使用のレベルで、はたらきかけ性をもつようである。

- ・「事件のほとぼりがすっかり冷めるまでは、油断しないほうがいいですわね」「油断しないで……どうすればいいんですか」「夜の外出を控えるとか、戸締りに気をつけて、つまり、ご自分でよく用心なさることでしょね」(夏樹静子「螺旋階段をおりる男」)

4. 過去形から感動表現へ

ひろい意味での「スルコトダ」形式にふくまれる感動表現は、動詞のばあい、その大部分の第一テンス形が過去形である。第二テンス形のほうは、非過去形と過去形があるが、過去形のほうが感動表現性がつよいようである。感動表現は、疑問詞系の修飾成分やモーダルワード、あるいは終助辞にささえられることがおおいが、「シタコトデアッタ」には、そのようなささえなしで感動表現になるものがある。

くて、「(おまえは) すぐいくことだね。」である。もちろん一人称のばあいもあるし(「いのちの初夜」)、無人称のこともあるだろう(「別れ上手」「わたしの童話」)。

この形式は、文法のレベルでは<そのひとは、その方法をとるべきだ>という、妥当な方法をしめしているのだが、二人称のばあい、使用のレベルでみるならば、はたらきかけ、ないし、すすめをあらわしているといえよう。

(1) スルコトダ (および、+終助辞)

- どんな事態になっても、ぼくとは関わりのない顔をしていることです。(訃報は)
- ケガをしたくなければ、おとなしくわれわれについて来ることだ。(夢枕獏「魔法狩り」)
- 悪いことをする時は、自分の名刺なんぞ持たずにやることだぜ。(魔獣狩り)
- トラックは魚くさかったが、魚屋が「何だか知らねえが、もうそろそろ夜が明けるだろう。河岸の松島かどっかで、一ぱいやって、気分をなおすことだね」と慰めてくれた。
(井伏鱒二「牧野信一」)
- そうです。決してあきらめないことです。(森村誠一「終着駅」)
- 「つまらねえ疑いはもたねえことだな」恭平は、サイドボードから煙草を抜き出して口にくわえた。(森村誠一「人間の証明」)
- 男とうまく共存していくのには、男の自尊心を上手に満たしてやることだ。
(森瑶子「別れ上手」)
- 不可能な空約束するのも、子どもにとっては、うそをつかれたことになりますね。だから、子どもには、ありのまんまで、決して見栄をはらないことですよ。
(住井すゑ「わたしの童話」)
- 佐柄木の世界へ到達し得るかどうかが、尾田はまだ不安が色濃く残っていたが、やはり生きて見ることだ、と強く思いながら、光の縞目を眺めつづけた。
(北条民雄「いのちの初夜」)

(2) スルコトジャナイ

とるべき方法でないこと(しなくてもよいこと)をあらわす。この「スルコトデハナイ」は、「スルコトハナイ」(高橋1994の4.参照)にいいかえることができるものがある。

- そんなに神経質に構えることでもないだろう？(火の河のほとりで)
- 「おまえの気にすることではない」菊千代は脇を向いたまま冷やかに云った。

「デキルコトナラ」は、「できるものなら」にかえても、そうふしぜんではないだろう。これは、ポテンシャルな意味をもっていることによって「コト」のもつ現象性がよわまるためかとおもわれるが、まったくおなじになるのではなくて、「デキルコトナラ、～シテミタイ」、「デキルモノナラ、～シテミロ」のように、かかりうけの傾向のちがいもみられて、おもしろい。

(3) 文脈的な挿入文

これは、文内のはさみこみ句節でなくて、文脈という観点からみたばあいのはさみこみ文である。形式的にみると、(ii)の条件がかけている点で(1)、(2)とことなるが、文章展開のうえでのやくわりが文法的な意味にズレをおこさせる点が共通である。

- ・旦那すみませんが、今晚一ト晩だけ泊まって行ってくだせえな。夫婦は裸で寝ても旦那に風邪をひかせるようなことはしません。旦那みたいに、柔らかい蒲団に寝た方は、たまには木綿の煎餅蒲団も話の種になることです。(三遊亭金馬「佃祭」)
- ・忠平にたのみこめば、大旦那にきこえる手前もあって、どこか産婦人科の医者をお世話してくれるかもしれない。忠平に責任もあることだ。こちらの苦衷をはなせば助けてくれぬでもない。(水上勉「越前竹人形」)
- ・しかし、これは安兵衛に言われるまでもなかった。もとより寛齋も承知の上で来たことだ。
(夜明け前)

3. とるべき方法

第一テンス形が非過去形であるもののなかには、「スルコトダ」「シナイコトダ」のかたちで、とるべき方法をあらわすものがひじょうにおおい。述語が方法をあらわしているものとしては、さきに1. の(2)であげた「自殺する簡単な方法は、身なげすることである。」のようなものがある。しかし、これは「AハBダ」に属するものであり、文法的な意味の点からいうと、BがAのあらわすコトガラの内容をあらわしているのである。そして、それが方法をあらわしているのは、Aが「方法」という単語でできているから、Bがその「方法」の内容をのべているという、語彙的な理由によるのである。

ここでとりあげている「コトデアル」は、主語がないのがふつうであるが、もし、おぎなうとすれば、「方法は」ではなくて、「ヒトは」である。それも、おおくは、二人称である。そのことは、文脈でもわかるし、終助辞のつけかたでもわかる。「(方法は) すぐいくことだね。」ではな

主語に対する意味関係から、節内での意味を設定できないわけではないが、かりに主語をおぎなってみるとしても、そのおぎないかたには、いくつかの可能性があるので、結局は、環境に対する意味づけを文法的意味とみたほうが有効であろう。順接は理由をあらわす傾向がつよく、逆接は前提をあらわす傾向がつよい。³⁾

(1) 非過去形や過去形に接続助辞のついたものから

- まあ、警察としては、裏をかかれたような感もありますからね。世間の関心も集まっていることだし、面目にかけても、一日も早い逮捕をと気負いこむのは当然でしょう。
(夏樹静子「訃報は午後二時に届く」)
- 精密な植物図鑑を繰ればわかることだが、ササは救荒植物の一つということになっている。
(開高健「パニック」)
- 「実は相談があるのだが」と、ひどくまじめに云いかけた。「——ざっくばらんに云ってしまうが、典木の家は立派に再興したこともあるし、ひとつこの辺で、おまえにこの山治の家を継いで貰いたいのだが、どうだろう。」(山本周五郎「思い違い物語」)
- しばらく眺めていてわかったことだが、麻以子は子供を遊ばせるのがうまかった。
(平岩弓枝「花ホテル」)
- わたくしが疲れたのはそのせいですわ。それも今になって気がついたことですけれど。
(石川淳「一目見て憎め」)

(2) 中止形や条件形から

終止形は接続助辞がついて、はじめて中止・接続形式になるのだが、こちらは、ほんらいそのような機能をにう形式である。こうしたものは、第二テンス形のかわりに非テンス形がつかわれているのだが、ダブルテンス形式の延長にあるものとして、ここでとりあげておく。

- 教団も最近は若い信者層が増加していることでもあり、彼らの意見を代表するような新しい候補者を送ったほうがよいという声が強くなっている。(夏樹静子「白い影」)
- 居間でテレビをつけておりましたせいか、離れのご様子にはまったく気付かずに……誠に申しわけの立たぬことで……(白い影)
- 若しそれが出来ることなら、どんなに助かることか！(丹羽文雄「厭がらせの年齢」)
- 丹念に体を洗い、頭を洗った。できることなら、胸を塞いでいる疑惑の思いも、洗い流してしまいたかった。(勝目梓「鬼畜の宴」)

(4) 立正大学文学部研究紀要 第11号

ブルテンスの述語形式として、今回の論文のテーマになるのである。

(3) 「AハBダ」との限界にある、「～トイウコトダ」による意味づけ

つぎの二文は、BがAを意味づけているが、「AハBダ」という構造になっているので、「AハBダ」構造として、対象からはずれるだろう。しかし、そのあとの二文の例は、文中にAがない。もし、これが単なる省略でなく、独立した「Bダ」構造なのだとすれば、ダブルテンスに登録しなければならない。

- ・ 姉に似ているということは、百合の父親にも似ているということだった。

(津島佑子「火の河のほとりで」)

- ・ オレは君みたいに、口が達者じゃないからうまいこと言えないけど、結婚するっていうのは、世間並になるってことだろ。世間と同じことをするっていうことだろ。

(林真理子「シガレット・ライフ」)

- ・ このアパートには学生を中心に女ばかり十名が住んでいることになっているが、実際の住人は十四五名いた。つまり二人にひとりは同棲をしているということだった。

(見延典子「もう頬づえはつかない」)

- ・ 結党三十年を迎える自民党の『新綱領』から「自主憲法」の言葉が消えそう。戦後四十年、野党が自衛隊と安保条約をしぶしぶ認めるほどに現実的になったのに対して、与党も新憲法をしぶしぶ認めるほどに現実的になったということか。現実的と現実的が歩み寄り、建前と本音を巧みに操作して進むゴマカシと成熟の時代に入ったということだろうか。

(毎日新聞 1985. 10. 3.)

また、もし、この形式の第一テンス形がいつも「いう」で、非過去形であることも独立したダブルテンスの存立理由になるのだとすれば、主語のある、まえ二文も、意味づけの「～トイウコトダ」として、いっしょにしなければならない。

2. 文終止の機能からはずれて、理由や前提をあらわす用法

もともとは、1でのべたような、述語が主語のしめすものの内容、属性、意味などをあらわす用法に属するものが、(i)主語がつかわれないこと、(ii)文の述語(=主節の述語)につかわれないことによって、文(主節)ののべていることがらの、場面や状況の設定ないし理由づけをあらわす挿入句の方向にずれていくものがある。これらは、かりに主語をおぎなってみると、その

- これはペンです。
- クジラはほ乳動物である。

つぎのようなものは、その名詞が連体かざりをうけても、「Bダ」としてとらえられる。

- さっきあそこにいたのは、もっとふとったひとでした。
- これは、ぼくがきのうかってきた本だよ。

また、つぎのようなものも、おなじパターンとしてとらえることができる。

- このことは、たびたび、慈海が葬式をするたびに慈念に教えたことなのだ。

(水上勉「雁の寺」)

- そんなに沢山な怪我人を出したことも、村の歴史としてかつて聞かなかったことだ。

(島崎藤村「夜明け前」)

また、動詞句が「コト」をくわしくしているのではなくて、「コト」が、そのまえの動詞句をひとまとめにして、それを名詞的な意味と機能をもつものにかえているようなばあいでも、つぎのようなものは、やはり、「AハBダ」として、とらえることができるだろう。²⁾

- 寿平次を見る度に半蔵の感ずることは、よくその若さで本陣庄屋問屋三役の事務を処理して行くことであった。(夜明け前)
- 自殺する最も簡単な方法は先ず身を投げることであるらしい。(菊池寛「身投げ救助業」)

この、(2)の第三例以下の例文は、すべて文末が形式的に「スルコトダ」になっている。しかし、これらの構造をよくみると、「スルコトダ」が一つのまとまりをもつ単位になっているのではなく、「コト」のまえの動詞句が「コト」といっしょになって、「B」に相当する名詞句となり、それが名詞あるいは名詞句どうし対応する「AハBダ」の構造をになっているのである。この形式的な「スルコトダ」において「スル」と「ダ」という二つのテンス形が「コト」をはさんでならんでいるのは、このばあいの「コト」名詞句がたまたま述語の位置にきたからであって、「スルコトダ」が述語形式として一つの単位になっているからではない。したがって、「AハBダ」構造のなかの「Bダ」は、今回の研究の対象からはずすことにする。

ところで、以上の諸例に対して、(1)の最後の例文では、「心配いたしたこと」に対応する「A」がない。しかも、これは主語の省略された文ではなく、「予も」という主語がりっぱに存在する。つまり、これは、「AハBダ」とはちがった構造の文なのである。こちらの構造は、「～コトハ～コトダ。」ではなくて、「ヒトハ～コトダ。」である。「予は心配いたしたことであった。」の「心配いたしたことであった」は、「心配いたしたものであった」や「心配いたしたのであった」や「心配いたした」などとはりあう述語形式である。したがってこの「シタコトデアッタ」は、ダ

ダブルテンスの観点からみた〈スルコトダ〉の種々相

高橋 太郎

1. 問題とここであつかう対象の範囲

(1) 対象と問題

ダブルテンスというのは、そのなかに二つのテンス形式をもつ述語形式（、または、それに準ずる形式）のことである。「スルコトダ」も、第一テンス形「スル」と第二テンス形「ダ」の、二つのテンス形式をもつ述語形式である。そして、ここで代表として「スルコトダ」をたてた形式は、それぞれのテンス形のテンス変化によってできる「スルコトダ」「シタコトダ」「スルコトダッタ」「シタコトダッタ」という四つの基本形式をふくむものであり、さらに、そのバリエーションとして、みとめかた（みとめとうちけし）やていねいさ（ふつうとていねい）やアスペクト（完成相と継続相）などによって、たとえば、「シナイコトデス」や「シテイナカッタコトデハアリマセンデシタ」のようなものまで、ここにはいってくることになる。

そして、この研究のテーマは、第一・第二、両テンス形のくみあわせのありかたが、「スルコトダ」というダブルテンス単位の形式に、どのような文法的性格を実現させるかということである¹⁾。たとえば、つぎの文は、第一テンス形も第二テンス形も過去形であるが、この、両テンス形のありかたが、この文の〈回想をあらわす〉という特徴とむすびついている。(4.の(1))参照)

- ・九月、東京地方に大震災起る。那智家は山の手なるをもって火災をまぬかる。惨状きびすを接して伝えられ、はじめは予も大いに心配いたしたことであつた。(船橋聖一「リツ女年譜」)

(2) この研究の対象からはずす「AハBダ」構造

名詞にコピュラをくみあわせたものは、名詞述語文の典型的な述語形式である。つぎの例のような、「AハBダ」という構造の文の「Bダ」がそれである。